



出口のない場所



「ライ麦畑でつかまえて」を
読んで

ヤマダヒフミ

結局の所、青春というものは誰にも忘れ去られるものらしい。誰しものが、若かった頃を思いだし、思いだしはするもの、そこにあった全てのものを、大人の苦笑で片づけてしまう。「あの頃は若かった」と。

あるいは、僕は――そうだ。僕は、それよりもっと怖ろしい気がする。この社会には根本的に「青春」が存在しないのではないかと。誰もが知った風な顔をする。子供は大人の顔を真似て、大人は偽善者の仮面を身につけ、そして誰もが自分とは違う誰かになろうとする。こんな世界では、自分であろうとする事は、この世界を見下すか、見下されるかして、孤立する他ない。――だが、一度も孤立を経験した事のない人間が、この世界では随分と多いのだ。

この世界は袋のようなものだ、と、特に日本人のような人種は考えていると思う。生まれては家族に属し、少し立つと、学校に、そしてまた少し立つと、会社に属し、そしてそうした袋の中の安定した価値観の中で安らかに死んでゆく。そして、この袋の世界の外側で生きてゆく事、その場所で思考する事を希求するのであれば、孤高の哲学者ニーチェや、罪と罰のラスコーリニコフのような、絶対的孤独、そして死か殺人か、それとも狂気か――とにかくそんな運命を選ばなくてはならないのだ。

ホールデンはニューヨークの街をうろつく。そして、彼はあらゆる事を軽蔑し、反吐を吐き、挙げ句の果てには可愛いガールフレンドに「頭がスカスカな野郎」と罵って、ガールフレンドを立腹させてしまう。だがもちろん、ホールデンはよく知っているはずだ。あのエレベーター係のように、頭が「スカスカ」の方が生きていく事は楽である、と。彼は一時の気まぐれで、つい自分の内にずっと抱き続けてきた感情を、偶然その場に居合わせたガールフレンドにぶつけてしまったに過ぎないのだ。だから、彼は謝る。関係を修復しようとすら、試みる。だが、結局、「頭がスカスカ」だと彼が思っている事、そして、実際にそのガールフレンドの頭が「スカスカ」であるという事実は変わらないのだ。――そして、ある視点からすれば、もちろん、この現在を生きている全ての人間は(ホールデンも、もちろん)みんな、頭が「スカスカ」に違いない。なぜなら、それが「生きていく」という事なのだから。

僕は夏目漱石「それから」の主人公代助を思い出す。彼もまた、自分の思考力の深さが人より透徹している為に、他人を、周囲の人間を馬鹿にしている。彼は自分がそこから金をもらっているにも関わらず、金をくれる父親や親類を芯から軽蔑しきっているのだ。彼にもやはり、ホールデンと同じく、この世界のどこにも出口はない。生きる事の馬鹿らしさを知った人間は、ロミオとジュリエットのように死という新たな出口を叩くか、それとも、代助のように社会と家族から追い出される事を決意して、新たな一歩を踏み出す他ないのだ。

ホールデンにももちろん、出口はない。彼は都市の中をうろついて、自分の家に帰るだけだ。――もちろん、彼が夢想したように、突然、西部に出かけて小屋を作って、そこで暮らすなどという事はない。どうしたって、彼はこの世界にうんざりせざるを得ない運命にあるから。西部には西部でまた、うんざりする奴らと物事が現れるだろう。

だが、この作品にもまた、クライマックスはある。それを担当するハメになったのが、妹のフィービーと、そして物わがりの良い先生ミスタ・アントリーニだ。この二人には、作者によってある程度は主人公に近い自意識と知性を与えられているのだが、それは結局は主人公ホールデン少年と同格なものとしては描かれなくなってしまった。もし、この内のうち二人のどちらかが、ホールデンクラスの精神性と自意識を持っていたなら、これはホールデン少年がこの世界にうんざりする冒険ではなくて、ドストエフスキーやシェイクスピアのような、人と人とのぶつかり合いの物語になっただろう。そして、この物語の核である、主人公ホールデンの流れるような告白体の、世の中にうんざりするが、その上を滑り落ちるように歩いていくこの小説の骨格そのものが成立できなかっただろう。

先生のミスタ・アントリーニの言う事は真っ当だ。それはそれまでの登場人物に見られなかった知性を持った言葉を放っているが、結局はミスタ・アントリーニは夜中にホールデンの額に触れるという行為によって、互いに離ればなれになる。だが、もしこんな行為がなくても、ミスタ・アントリーニは真っ当な事を言い、ホールデンはそれにほとんど納得しながらも、そこから離脱し、逃げ出すという事は確実だ。ホールデンはまだ社会に融和する素質――そんな運命も、そんな覚悟も存在していない。

だが、もっと重大な変化は妹フィービーによって起こされる。これがこの物語の最後で、最大の変化なのだが、それは結局、主人公の自意識を揺らがす所まで行かない。

ここでは、おもしろい転倒が起こる。フィービーはホールデンを真似て、自分も西部だかどこだかに一緒についていきたい、と半ば子供の出来心で、半ばは真剣にそう言い出すのだが、ホールデン少年はこのフィービーを止める側に回るのだ。それと共に、ホールデンは自分がどこかこことは全く違う田舎の場所でひっそりと暮らすという自分の考えも、自分がついた一つの冗談である事を悟り(あるいは既に悟っており)、その考えも一緒に撤回する。そしてホールデンは無事、フィービーを家に帰す。

ここではもちろん、これまでの主人公の役どころが反対側に回る唯一の瞬間なのだ。これまでは、無鉄砲で全てを馬鹿にしていたホールデンを、周囲の常識的な人々が押しとどめ、自分達の約束事を守らせようとしたのだが、結局それはできなかった。だが、ここでは、ホールデンは常識的な立場に立って、フィービーを押しとどめる役割を演じる。――ここで、いわば決定的になる事は(あるいは最初から決定されていた事は)、どこかここではない場所で静謐として暮らすというのは、最初からホールデンにとっても冗談でしかなく、いわば、全てがホールデンにとっては冗談にすぎなかった、という点にある。そして、彼が会おう全ての人々は、ほんの小さな煌めきを見せるごく一部の人を覗いては、みな偽物に過ぎないのだ。(そして、主人公がふと思いつく、絶対に自分を曲げようとしなかった為に、階上から落ちて死ん

でしまった学生は、彼が思い出す、この世界の小さな煌めきに該当する。)

だが、そうかといって、この偽物だらけの都会の他に、ホールデンが行くところはどこにもないのである。例えこの世界が偽物だらけ、インチキでできあがってしまっているとしても、今更、ホールデン少年にとって行く場所は「どこにもないのだ」という点に――フィービーを通じて――悟る所で、この物語は終わる。

この物語に続きはあるのだろうか?・・・ホールデン少年には、「先」があるのだろうか?・・・僕には、ホールデンは、絶えず振り子状に、この世界にうんざりしてその外に出ようとするも、その虚しさをすぐに悟って、またこの偽物だらけの世界に戻ってくる・・・そんな往復運動をしている一人の人間の映像を直知する。・・・だが、僕達もまた、ホールデン少年といかに違うだろうか?・・・この少年を軽蔑するのは、社会にいわば改造された大人にはたやすい事だ。だが、この世界が偽物とインチキでできているという真実に我々が出くわす度、私達はその都度にあのニューヨークの街をふらついているホールデン少年の事を思い描くのだ。